

植民地ナショナリズムの終焉

— 『レッド・ロウバー』 から 『ウォーター・ウィッチ』 へ —

米 山 正 文

はじめに

ジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) の初期の海洋小説は、米国の植民地時代を舞台とし、主に、英国と北米13植民地 (後に米国となる地域) との関係を描いている。最初の『水先案内人』 (*The Pilot*, 1824) では独立戦争を扱い、植民地軍の若き士官たちと、彼らを後援する水先案内人の英国沿岸での活躍を描いている。二作目の『レッド・ロウバー』 (*The Red Rover*, 1827) (日本語訳では「赤い海賊」) では、より時代を遡り、1759年のロードアイランド植民地ニューポートを舞台に、英国海軍士官ワイルダー (Wilder) と、英国 (本国) に反逆する植民地出身の海賊レッド・ロウバーこと、ハイデガー船長 (Captain Heidegger) との対決を描いている。そして、三作目の『ウォーター・ウィッチ』 (*The Water-Witch*, 1830) (日本語訳では「海の魔女」) は、さらに時代を遡り、1710年代のニューヨーク植民地を舞台に、やはり英国海軍に属する若き士官ラドロウ (Ludlow) と、英国海軍の追跡を回避し続ける密輸船の船長トム・ティラー (Tom Tiller) との対決を描いている。このように、第一作と、第二、三作は舞台が異なるものの、植民地時代における英国軍と、本国に反逆する植民地の人々 (独立戦争の士官、海賊、密輸業者) との対立を描くという点で、共通しているのである。

この三作を、クーパー海洋小説研究の第一人者トーマス・フィルブリックは「三部作」 (trilogy) と呼び、「アメリカとイングランドとの離反が徐々に大きくなっていく過程、アメリカの国家的な意識が徐々に目覚めていく過程」を描いていると指摘し、「海のナショナリズム」 (maritime nationalism) というクーパーの信条を表していると指摘している¹。上記三作のプロットにおいて、すべて植民地側が勝利していることから、フィル

ブリックの指摘は説得力を持つものである。

『水先案内人』と「海のナショナリズム」との関係は別の拙論ですでに論じているため²、この小論では、『レッド・ロウバー』『ウォーター・ウィッチ』とナショナリズムとの関係を考察する。同じ三部作に属するとはいいながら、この二作には第一作と明確に異なる点が二つある。第一に、舞台が英国沿岸ではなく植民地沿岸であること、第二に、三作とも若き主人公と熟練した中年水夫との関係に焦点をあてているが、『水先案内人』ではそのグリフィス (Griffith) とグレイ (Gray) とも同じ植民地軍に属しているが、次の二作では主要二人物は英国側と植民地側で別れ、対立する立場になっている (『レッド・ロウバー』のワイルダーとハイデガー、『ウォーター・ウィッチ』のラドロウとティラーがこれに当たる)。こうした相違点が、この二作をより複雑にし、かつ共通に論じる意義を与えているのである。

これまでの批評史を見ると、『水先案内人』と同様、『レッド・ロウバー』と『ウォーター・ウィッチ』についても、批評家たちは主にナショナリズムとの関係を分析してきた。この伝統を打ち立てたのは、先述のフィルブリックである。『レッド・ロウバー』についてフィルブリックは、ハイデガー船長の、英国に反抗する海賊行為に「個人による独立戦争」や「アメリカ独立への夢」を見出し、『ウォーター・ウィッチ』では、英国による植民地への貿易制限をすり抜けるティラー船長に「商業的自由への欲求」と「政治的独立への渴望」を読み取っている³。後の批評はフィルブリックの解釈をもとに発展してきた。たとえば、ドナルド・リンジはフィルブリックの解釈を追認し、ハイデガーとティラーの「愛国心に基づいた動機」ゆえに、彼らをクーパーは「正当化」しようとしているとし、「大英帝国とその植民地との乖離と

いうクーパーのテーマ」があると指摘している⁴。ダニエル・ベックとヒュー・イーガンは「三部作」全体を分析し、フィルブリックの指摘するナショナリズムというテーマは認めながらも、作品を経るに従って、それが徐々に弱まっていると指摘している⁵。

また、三部作に関しては近年、重要な二つの論考が出されている。マーガレット・コーエンはフィルブリックの解釈を発展させ、professionalismという観点からクーパー海洋小説のナショナリズムを分析している。コーエンによれば、それまでの海洋小説と異なりクーパーのものは船乗りの専門的技術の見事さに焦点を当てており、アメリカ植民地人水夫の有能さを描くことが「海のナショナリズム」に通じているという。世襲的地位ではなく、労働における技術が認められ、それによって結ばれた共同体こそがアメリカ的であるというのが『水先案内人』や『レッド・ロウバー』の世界なのである⁶。しかし、同年に発表された論考で、ルイス・イグレスシアスはコーエンと反対の解釈を提示している。イグレスシアスによれば、船乗りとしての技術はとりわけアメリカに限定されないのがナショナル・アイデンティティとはなりえない、むしろ『レッド・ロウバー』ではハイデガーの海賊船の構成員は「多国籍」であり、海賊であるハイデガー自身も植民地（陸地）との関わりは「寄生的」であり疎遠である、ハイデガーは「国際的」もしくは「国家外の」存在であり、かつ国家よりも私益を重視していると述べている⁷。このように、両方とも精緻な論考でありながら、クーパー海洋小説のナショナリズムについては対照的な解釈を提示しているのである。

本論では、こうした批評史を踏まえながら、『レッド・ロウバー』と『ウォーター・ウィッチ』に焦点を当てるが、二つのテキストのナショナリズム機能はある程度認めながらも、非ナショナリスティック的要素に注目する。その要素は、『レッド・ロウバー』から『ウォーター・ウィッチ』へ移行するとさらに強くなる。以下、まずは、フィルブリックがもっとも評価し、批評家にもっとも論じられてきた『レッド・ロウバー』のナショナリズムを再考することとする。次に、『ウォーター・ウィッチ』に焦点を当て、主に『レッド・ロウ

バー』との相違点を分析し、クーパーの非ナショナリスティック的要素がどのように発展したかを明らかにする。

1 他者としての主人公——『レッド・ロウバー』

『レッド・ロウバー』におけるナショナリズムは、主人公のハイデガー船長が体现している。ハイデガーは以前、英国海軍に所属していたが、「故郷（my country）」である植民地を、「繰り返せばワイルダーの耳を汚す」ような言葉で侮辱したという上官に決闘を挑み、殺害して海賊となったと言う⁸。海賊船の船長として、また英本国への服従を嫌う植民地人として、ハイデガーがもっとも固執するのが海賊船の旗である。この旗についてハイデガーはワイルダーに、大自然の豊かさなど、英本国と比べて「故郷」の優越している特徴が正確に知られれば、海賊船の「旗はすぐにあらゆる海で見られるようになるだろうし、故郷の人たちも外国の王子の雇われ人にこびへつらう必要はなくなるだろう」と述べている。(302) ハイデガーにとって海賊船は植民地の代表であり、旗は植民地の象徴なのである。それゆえ、ハイデガーは逆に、英海軍巡洋艦ダート号の「思い上がった旗」を英本国の象徴として引き摺り下ろそうとする。(417) マーガレット・コーエンは海賊船の旗が赤色であることに注目し、それが血、すなわち「人間性（humanity）を表す、普遍的かつ一般的なしるし」を表し、貴族性（aristocracy）を表す青色と対比されていると指摘している⁹。

旗のイメージは、物語の最後の場面でも繰り返される。死に際のハイデガーはワイルダーに星条旗を開いて見せ、「われわれは勝利したのだ！」と叫び、高揚した状態で亡くなっていく。(440-441) 海賊として植民地のために戦い、独立戦争では兵士としてやはり植民地のために戦ったハイデガーを、愛国者として一つに統合するものが旗なのである。フィルブリックは、旗こそ海のナショナリズムという、作品を貫く「テーマ上の象徴」になっていると指摘している¹⁰。

興味深いのが、小説のプロットを吟味したとき、それがハイデガーのナショナリズムを追認しているということである。ハイデガーの海賊船ドルフィン号が英海軍巡洋艦ダート号に勝利するとい

う展開、より詳しくいえば一介の海賊でしかないハイデガーが地位も名声もある英国職業軍人に個人的能力で勝るといふ、デモクラシーを称揚する展開については多言を要さない。ここで注目したのは、ハイデガーが決闘を挑んだ上官と同じような、植民地を侮辱する人物の顛末である。その人物とは、ワイルダーが最初に船長となり、後に難破するローヤル・キャロライン号の航海士、ナイトヘッド (Knighthead) である。もともとこの船の船長はニコラス・ニコルズという人物だったが、負傷のため、急遽ワイルダーが代理の船長を務めることになった。出航後、航行が嵐に直面した際、ナイトヘッドはワイルダーへ不信感を表明するが、他の船員たちに以下のような言い方をする。

いいかみんな、冷静に分別をもって、かつ賢明なイングランド人 (Englishmen) に相応しいやり方で、この状況をしっかり考えてみようじゃないか。……われわれは一人残らず、生粋のブリテン島生まれであり、外国人の血 (foreign blood) など一滴も混じっていない。……[ニコルズがいなくなって] ここに来たのが、新参者で、しかも植民地人の雰囲気 (a look of the colonies) をもっている。片方の手のひらで覆い隠せるような、おれたちイングランド人 (English) の、正直でまったく滑らかな顔つき (face) など持ってもいないのだ。(208)

これに対し、ある水夫が反論すると、さらにナイトヘッドは「あの男は確かに見た目はいいさ、しかしな、イングランド人 (Englishman) が好むような良さじゃないんだ。あの男には何かある、それが俺には気にいらぬのさ」と言う。(208-209) 度重なる「イングランド人」への言及、またその出自への固執と誇りは、ナイトヘッドの英本国中心主義を表している。それがナイトヘッドの排他性を生み、植民地出身のワイルダーへの不信と軽蔑をあからさまに表明しているのである。(「ナイトヘッド (Knighthead)」という名前自体、貴族制を想像させ、英国のイメージを強化している)。

この後ナイトヘッドは仲間と反乱を起こし、ローヤル・キャロライン号を去っていく。しか

し、彼らのボートは難破し、全員が海に放り出される。ナイトヘッドはその後、再び溺死体となってワイルダーらの目の前に登場する。ナイトヘッドの死体は「黒い物体」として海中から現れ、その「恐ろしい表情 (frightful features)」をワイルダーらに向ける。それはワイルダーらにとって「ぎょっとさせるような光景」であり、ナイトヘッドの「死によってこわばり、ぞっとさせるような」「陰しい顔つき (countenance)」を目にするのである。(254) この場面は明らかにゴシック・ロマンス的であり、読者の恐怖を高めることが意図されているが、「顔つき」に二度も言及されていることに注意したい。顔つきこそ、ナイトヘッドがワイルダーを侮辱する際に強調していたことだからである。ナイトヘッドへのこうした皮肉、そのゴシック的恐怖を与える末路は、ナイトヘッドへの罰が下ったという印象を読者に与える。ここには反乱そのものへのクーパーの政治的不信感もあろうが、英本国中心主義への批判、さらには、ハイデガーと同じく、植民地への侮辱は許さないという姿勢を読み取ることができる。

ここまで、『レッド・ロウバー』のナショナリストの特徴を見てきたが、このテキストにはそれと相反する部分もいくつか見出される。そうした部分は、このテキストのナショナリズムを脱構築する働きがある。

まず、「悪役」であるナイトヘッドは確かにゴシック化されていたが、実は主人公ハイデガーもゴシック的に描かれている。ハイデガーはテキスト全体を通して「他者」として描かれている。クーパーは主にワイルダーの視点を使ってハイデガーを描いているが、ワイルダーにとってハイデガーは捉えがたい存在である。ハイデガーは変幻自在の詐欺師的人物であり、酒場の「緑色の服の男」として現れたかと思うと、老水夫ボブ・バントに変装し密かにワイルダーを偵察する。さらに、自らの海賊船は奴隷船を装い、世界各国の旗を所有し状況に応じて各国の船を装い、他の船の目を欺く。敵である英海軍巡洋艦に「ハワード船長」として乗り込み、完璧な「紳士的雰囲気とマナー」でビッグネル艦長の眼を欺き、内心で愚弄している。(394-395)

また、若きワイルダーにとって、ハイデガーは

並外れた航海術や戦闘能力、リーダーシップを誇る、人間離れした船長である。ハイデガーら海賊との戦闘に敗北した際、ワイルダーの目はハイデガーを追うが、「ロウバー [ハイデガー] の微動だにしない姿」や「いつもの無表情な顔」を捉え、さらに「伸張していく、直立した、勝ち誇った姿」を目で追うが、その姿が「突然かつ不可思議に膨張していくように」見える。さらに、ハイデガーは片方の手を血の滴る「トルコ剣」の柄に載せ、片方の足は「それを引きずり下ろすことがずっとハイデガーの誇り」だった英国旗の上に置かれるが、それは「信じがたいほどの (supernatural) 重み」で置かれているように見える。ハイデガーの目は「状況を完璧に理解して」いるように見え、海賊たちが略奪を行おうとすると「絶対的な権力」による規律で、彼らを制止する。(418-419) ワイルダーにとって、ハイデガーは内面が見えない不可解な、かつ超人的な船長なのである。

作者クーパーもハイデガーをゴシック化しているように読める。ハイデガーが星条旗を持って亡くなる、小説の最後の重要な場面は、以下のように描写されている。

「ワイルダー！」彼 [ハイデガー] は狂ったように (hysterically) 笑いながら、ワイルダーの名前をもう一度呼んだ。「われわれは勝利したのだ！」——そう言うと、後ろに倒れこみ、動かなくなった。狂喜した顔つきはついに、死人の暗い表情へと変わった。まるで、暗がり太陽の明るい微笑みを曇らせたかのようであった。(441)

「狂ったように」や「狂喜した」といった表現は、ハイデガーに異様で病的なイメージを付与している。「暗がり」への言及は、読者に暗い読後感も残す。ナイトヘッドの死に様のようなゴシック的恐怖を高めるものではないが、ハイデガーもゴシック的人物に描かれていることは確かである。また、主人公の死に様を描くにはあまりにも短く中途半端である。作者クーパーがハイデガーを英雄として描いているか疑問である。

また、先述した、ハイデガーが英海軍との戦闘後に勝ち誇る場面で、「トルコ剣」を持っていた

という描写も興味深い。それは異国的なイメージをハイデガーに付与するものだからである。他の場面で、語り手はハイデガーを「無法者の首長 (chief)」と二度呼んでいるが、この chief という言葉は先住民を想像させる。(402, 420) 作者クーパーがハイデガーを、文化的・民族的にも「他者」として描いていることが分かる。

ハイデガー自身のみならず、その海賊船にも注目すると、さらにハイデガーは脱中心化される。先述したように、海賊船は植民地の代表、つまり (まだ形成されていない) アメリカの象徴であるが、その海賊船は必ずしも理想郷とは描かれていない。語り手によれば、海賊たちはヨーロッパの海洋国およびアメリ植民地からの雑多な民族の寄せ集めであり、「反抗的で乱暴な一団」である。海賊行為という「無法な仕事」や「荒々しい冒険」に相応しい連中で、「非常に危険で・・・不穏な船員たち」である。(352-353) 実際、ワイルダーらがハイデガーの船に救出され新たな船員となった後、彼らと対立すると彼らを殺害しようとするし、最後の戦闘の後でワイルダーらが英海軍のスパイだと分かると、「古のしきたり」に習い「裏切り者」として報復 (= 処刑) しようとする。(285-286, 419-420) こうした船員を統率するには強大な権力が必要となり、それがハイデガー船長である。ハイデガーの「知性」は、船員たちに対し「どのように専制的 (despotic) な支配力を持ち、維持し続けるか」を知り尽くしている。(353) 船員たちがワイルダーらと対立する場面でハイデガーが制止すると、この「凶暴で興奮した群集」が、「権威あるものに叱責された、いたずらっ子」のように「無抵抗で、卑屈で、従順」になる。(287) また、ハイデガーは巧みなリーダーであり、デイヴィス (Davis) という船員をスパイに使い、船員たちの中で何か不穏な動きがないか絶えず監視している。そのデイヴィスにさえもただ金貨を与え、「無知」な状態に置くようにしている。(299) ハイデガーの海賊船は、絶えず反乱の危険にさらされている危うい状態であり、強大で巧妙な権力者がいなければ秩序は成り立たない。ハイデガーが「専制 (despot)」のイメージで描写されているように、ここは理想的な民主主義の共同体とはなっていないことが分かる。

また、この共同体は物語の最後で、他ならぬハイデガーの指示によって解散させられ、海賊船も破壊される。その前の、海賊たちがワイルダーらを処刑しようとする場面で、ハイデガーはそれを黙認しようとする。ところが、同船していたウィラス夫人 (Mrs. Wyllus) が、ワイルダーがかつて生き別れになった息子だと知り、息子の命を守ってくれるようハイデガーに必死で懇願する。ハイデガーは一日置いた後、全員を集め、海賊団の解散を宣言する。つまり、ハイデガーは母の子への愛情に屈することになるのである。さらに、物語の最後で、ハイデガーが実はウィラス夫人の兄弟で、ワイルダーは彼の甥であることも判明する。このことは、植民地側の代表として戦っていたハイデガーと、英海軍士官として戦っていたワイルダーを、血縁関係で結びつけるものである。別の言葉でいえば、アメリカ (植民地) と英国との間に血縁関係のイメージを作り上げるものであり、両者の対立関係を解消する働きがある。また、お互いは対立する関係ではあったが、ワイルダーはハイデガーの海賊船で船長としての *professionalism* を学び、ハイデガーを「並外れた人物」であり「男らしい自信」を持った船長として尊敬している。(383, 414) 海の世界において、ハイデガーはワイルダーの *mentor* であり続けたのである。

海賊船と英海軍巡洋艦との戦闘が終わったあと、両者は語り手によって「ドルフィン号とダート号は並んで、友好的状態で (*amity*) 航行していた。後者は再びイングランドの旗を掲げていた」と描写されている。(431) この描写は英本国とアメリカ (植民地) の和解と親睦のイメージを喚起している。その前の戦闘の場面でも、語り手は英海軍を貶めることなく、攻撃された英国人 (*The English*) は「受けた衝撃から勇ましく (*manfully*) すぐさま回復して」反撃したと述べたり、巡洋艦の船員は「自分たちの職務に忠実で、昔からの名声を貶めることのない」者たちであったと述べたりし、英軍人の勇敢さを称えている。(409, 413) こうした一連の語り手の描写は、対英国へのアメリカ・ナショナリズムを弱めるものである。『レッド・ロウバー』の人物関係や語り手の描写、物語の展開は、このテキストが、ただ単に独立戦争の

勝利に高ぶるハイデガーに見られるような、ナショナリズムを称揚するものではないことを示しているのである。

II 『ウォーター・ウィッチ』の *cosmopolitanism*

『レッド・ロウバー』の3年後に発表された『ウォーター・ウィッチ』は、前作と多くの共通点を持っている。主人公トム・ティラー (Tom Tiller) はハイデガーと同じようにアメリカ植民地出身であり、知的で経験豊富な船長でもある。ハイデガーは海賊船の船長であったが、ティラーは密輸船の船長で、植民地の商業活動を規制する英本国に反逆している。ティラーの密輸船ウォーター・ウィッチ号はハイデガーの海賊船と同じく、様々な国籍からなる植民地アメリカの象徴である。ハイデガーに若き好敵手ワイルダーがいたように、ティラーには密輸船を取り締まる若き英海軍巡洋艦長ラドロウ (Ludlow) がいる。ナショナリズムとの関係から、フィルブリックはこの二作について、ハイデガーは「私的な独立戦争」を行い、物語の最後で実際に独立の夢を達成できたと指摘し、ティラーでは「政治的独立」への熱望と「商業的自由への欲求」が一体化していると指摘している¹¹。

『ウォーター・ウィッチ』を吟味すると、確かに前作と共通する、ナショナリスティックな部分がいくつも見られる。たとえば、ハイデガーは故郷が英本国に勝る点について「自然の豊かさ」を挙げていたが、同じような場面は、植民地在住のアリダ (Alida) が、密輸船の船員シードリフト (Seadrift) と会話する場面にも見られる。「ヨーロッパ人のアメリカへのあざけり」を気にするアリダに対し、世界中を巡っているシードリフトは「古い共同体 [ヨーロッパのことを指す] がよく犯す間違いは、自分たちを過大評価し、国々の集まる壮大な劇の中に登場した新参者 [アメリカを指す] を過小評価することです」と言い、イタリアとアメリカの景観を客観的に比較してみせ、前者の「繊細さ」と後者の「豪華さ」に言及した後で、「アメリカは自然の美しさ (*Nature's beauty*) を目にできることに誇りをもつ」べきだと述べる¹²。こうした言葉は、アメリカ読者の劣等感を解消し、彼らのナショナリスティックな感情に訴えかける

役割がある。ハイデガーという1人の植民地代表者ではなく、ヨーロッパを広く渡っている密航船員の言葉を使い、クーパーは前作よりもアメリカの自然の雄大さを強調していることが分かる。

また、ヨーロッパに関しては、コーンバリー卿(Lord Cornbury)という、ニューヨーク植民地の前知事が登場するが、密輸業者と密かに通じ私服を肥やしている腐敗した人物、腐敗した貴族という、旧世界を揶揄する stock character になっている。(315-320) それと対照的に、ティラーは「生まれつきの貴族 (aristocracy of nature)」、つまり世襲的な社会的地位ではなく、個人的能力によって尊敬されるリーダーになっている。(316) ラドロウの巡洋艦コケット号がフランス海軍に攻撃され、船内の階級 (rank and authority) がまったく機能しなくなった混乱の中で、ティラーはラドロウに先んじてリーダーとなり、「平水夫 (common men)」と協力して事態の打開にあたる。(387-388) ティラーは明らかに民主主義的なヒーローとなっており、こうした人物造型はハイデガーと共通している。

さらに、密輸船と海賊船という違いはあるが、ティラーの船とハイデガーのそれは対英本国との関係で類似している。ハイデガーが英国旗に対抗して赤い旗を掲げていたのと同様に、ティラーのウォーター・ウィッチ号はアン女王に対抗する「海緑色の淑女 (Sea Green Lady)」と呼ばれる船首像 (figurehead) を持っている。(176) また、ウォーター・ウィッチ号とラドロウのコケット号は敵対関係にあるが、コケット号はティラーの部下シードリフトを捕虜にとりながらも、決してティラーの船を捕らえることができない。それどころか、コケット号はフランス軍の攻撃を受けて爆破することになり、逆にウォーター・ウィッチ号は生き延びる。ワイルダーのダート号がハイデガーのドルフィン号に敗れたように、ラドロウの巡洋艦はティラーの密輸船に勝利することはできないのである。こうした英海軍への対抗姿勢や、その後の勝利という点で、『ウォーター・ウィッチ』は前作のナショナリスティックな特徴を受け継いでいる。

しかし、『ウォーター・ウィッチ』を『レッド・ロウバー』と比較すると、様々な違いも浮かび上

がってくる。『レッド・ロウバー』では、ハイデガーの船とワイルダーの巡洋艦は実際に戦闘をし、前者が後者に勝利するが、『ウォーター・ウィッチ』では、ダニエル・ベックが指摘するように、ラドロウの巡洋艦はティラーのウォーター・ウィッチ号をただ追跡するだけで、両者が実際に戦闘することはない¹³。それどころか、英巡洋艦がフランス海軍の攻撃を受けた際、ティラーが巡洋艦に乗り込み、ラドロウを援助する。ティラーとラドロウは団結してフランス軍と戦う。(この時、ティラーはラドロウの mentor となり、船長としての professionalism を身をもって教える)。つまり、共通の敵フランス軍の出現によって、ティラーとラドロウの敵対関係は解消され、アメリカ植民地对英本国というテキスト上を貫いてきた対立関係が、英国対フランスという対立関係へと移行していくのである。『レッド・ロウバー』でも戦闘後に、英巡洋艦と植民地海賊船の友好関係が描かれていたが、共通の敵に対し協力して戦うなどということはない。プロット上におけるフランス軍の唐突な出現は、テキストの対英ナショナリズムを崩し、逆にティラーとラドロウを同じ「英国人」として1つに結びつけるものである。

この点に関して、ティラーのラドロウへの言葉も示唆的である。援助を申し出るティラーに不信感を持ち続けるラドロウに対し、ティラーは自らも植民地出身であることを告げ、さらに、「この海峡においては、おれは二重の意味で、あなたの同国人 (your countryman) なのだ」と述べる。(369) 「海峡」というのは植民地を指す metonymy であり、「二重」というのは、英国人であると同時に植民地人であるということを示している。さらに、ティラーは戦闘中にアメリカ沿岸に来るのはこれが最後になることを暗示し、ラドロウには「あの旗と、生まれた土地」への誉れとなるのだと教え伝える。(382) この「旗」は英国旗を指し、「生まれた土地」は植民地を指している。ティラーのこうした言葉は、英本国と植民地の対立関係を崩し、彼らが両方に属するというイメージを作り上げるものである。つまり彼らの位置は、植民地人でありながら英国人であるという、曖昧なものへとなる。こうした曖昧さは、『レッド・ロウバー』でハイデガーがずっとワイルダーに表明してい

た、対英本国の植民地ナショナリズムと相容れないものである。

逆に、ハイデガーに見られる非ナショナリスト的要素は、ティラーにも受け継がれ、強調されている。ハイデガーの文化的・民族的「他者」性は先述したが、ティラーについて語り手は頻繁に「インド製ショール」(42-43)を身に着けた男と言及している。この「インド製」という言葉の繰り返しは、ティラーに異国的他者性のイメージを付与するものである。これはティラーだけではない。ティラーの部下のシードリフト(男装したユウドラという女性であると後に判明する)も、「真っ黒な(coal-black)目」をしており、ティラーと同じような衣装で、フロックコートは「インド製」の絹でできたもので、服の間から湾曲した「アジア製の短剣」を覗かせている。(89-90)こうした外観は、シードリフトにも民族的・文化的他者性を与えるものである。『レッド・ロウバー』ではハイデガーにのみ他者性のイメージが見られたが、シードリフトの他者性は、ウォーター・ウィッチ号の船員全員が他者的であるというイメージを作り上げている。

そして、このウォーター・ウィッチ号に注目すると、ハイデガーの海賊船ドルフィン号とはかなり異なる特徴に気づく。ドルフィン号は文字通りアメリカ沿岸の海賊船であり、この海域で英海軍とも対立している。しかし、ウォーター・ウィッチ号は密輸船であり、商品調達のため地中海沿岸を中心にヨーロッパ各地や、おそらくアジアやアフリカへも行く商業(密輸)の船である。今は商売のために一時的にアメリカ沿岸に寄航しているだけにすぎない。むしろ、ラドロウの英巡洋艦コケット号の方が非常に長い間「アメリカ海域の誇り」であり続けたのである。(393)つまり、植民地と結びつきが強いのはコケット号であり、ウォーター・ウィッチ号はむしろ諸外国と結びついている。アリダにとってシードリフトがカタログ的に紹介する商品はイタリアの各都市やアフリカのムーア人との交易で手にいれた高価な外国産である。(104-105)また、ヨーロッパにおいて「ジブラルタル海峡とカテガット海峡の間で訪れていない場所はほとんどない」と言い、幼少期のほとんどをイタリア、フランス、フランドルの沿岸で

過ごしたと言うシードリフトの話は、アリダには有益な(とりわけイタリアの)旅行ガイドとなっている。(261-265)植民地については、ナポリとマンハッタンをただ客観的に比較するだけである。(265-267)アリダにとってシードリフトは外国の人間であり、シードリフト自身にも植民地への愛着は何も見られない。ハイデガーのドルフィン号と異なり、ウォーター・ウィッチ号が植民地の象徴とは到底言えないのである。

つまり、ティラーの一団は、ハイデガーのそれより商業的(commercial)で、全世界的(cosmopolitan)であるということである。ルイス・イグレシアスはハイデガーについて、その海賊行為が様々な外国船を対象としており、「新世界に対するイギリスの帝国主義」に伴う海賊行為と結びついていると解釈しているが、イギリス帝国によるヨーロッパや新大陸を対象とした商業活動を体現しているのは、むしろティラーのウォーター・ウィッチ号だと解釈できる¹⁴。『レッド・ロウバー』ではドルフィン号の商業的利益についてよりもハイデガー自身に焦点が当てられ、英海軍内で受けた侮辱や、英本国には決して屈しないという彼の熱情が中心になっている。しかし、『ウォーター・ウィッチ』では、ティラーは「腐敗した」英国貴族コーンベリー卿とも商業的利益でつながっている。この「腐敗した」権力に頼り、金貨の入った袋をちらつかせて、英海軍の捕虜となったシードリフト解放への働きかけを依頼するのである。(317-320)語り手はシードリフトのことを「密輸品の商人(dealer in contraband)」(97)と何度も呼び、ティラーを「自由貿易人(Free-trader)」(397)と何度も呼んでいるが、彼らは本質的に「商売人」なのであり、その商売を規制する限りにおいて英国への不満を表している。つまり、『レッド・ロウバー』におけるハイデガーのように、英本国に対する植民地の政治的低位に不満を持っているわけではないのである。

また、ティラーは植民地への愛着について「生まれた土地」、もっとも幼い頃の「人生で最も幸せな日々を過ごした」場所と言うだけで、それ以上は何も語らない。(368)さらに、ラドロウが英国への忠誠があるのなら密輸船の船長などにならないはずだと言うと、英国は「その子供たちが

祖国に抱く愛着を、独占や不公正によって離反させる」べきではないとだけ言い、わずかに英国への批判（不平等だという批判）を表明しているだけである。(369) 英国への批判については『水先案内人』のグレイに比して相当に軽減しているし、故郷への愛着については『レッド・ロウバー』ハイデガーのようなものはほとんど見られない。ティラーは国家（土地）への執着など薄く、むしろ商業的利益を求めて世界じゅうを渡り歩く cosmopolitan な人物だと判断できる。英国の法を守ろうとするラドロウがティラーに、おまえは「お尋ね者」ではないかと責める場面があるが、ティラーは「確かにおれはお尋ね者で密輸業者だが、それでもおれは人間だ (human)」と答えているが、この言葉はティラーの立場を簡便に表している。(368)

最後に、『レッド・ロウバー』と『ウォーター・ウィッチ』の最後の場面を比較すると、著しく異なることに気づく。『レッド・ロウバー』では、独立後のアメリカになっており、独立戦争で負傷したハイデガーが、姉妹のウィラス夫人と、甥ワイルダーとワイルダーの妻ガートルードに看取られて亡くなっていく。ハイデガーの最期が、独立戦争の勝利への歓喜の叫びであることは先述の通りである。一方、『ウォーター・ウィッチ』では、ティラーの船が植民地を去っていき、二度と戻ることはなかったという終わり方になっているだけである。植民地でのその後のラドロウとアリダの夫婦生活が描かれることもない。

ウォーター・ウィッチ号と植民地を結びつける唯一の要素が、シードリフト（＝ユウドラ）が、植民地に住むアリダの叔父／伯父アルダマン (Alderman) の生き別れた娘だったと判明する展開である。この場面は、『レッド・ロウバー』で、ワイルダーがウィラス夫人の生き別れた息子だったという展開と類似している。この後、独立後のアメリカでワイルダーは母ウィラス夫人と一緒に生活している。しかし、『ウォーター・ウィッチ』ではユウドラとアルダマンは一緒にならないという幕切れになる。

この場面は複雑であり、当初ティラーは妹のように可愛がってきたユウドラのことを思い、アルダマンが父親であることをアルダマン自身に

告げ、さらにユウドラにはニューヨーク植民地の若き地主オロフ・ヴァン・スターツ (Oloff Van Staats) の妻となって、父のいる植民地に住むように取り計らう。ユウドラもそれを受け入れ、物語は終わるかに見えた。しかし、ユウドラが「養子」のように可愛がっていた孤児ゼファー (Zephyr) がユウドラと植民地で生活することを断り、いざティラーの船が立ち去ろうとすると、ユウドラは半狂乱のようになり「私はあなたのものです」とティラーに叫ぶ。ティラーが「おまえはここで父親も友人も夫も手にできる」と説得してもユウドラは聞かず、最後はユウドラの熱情に突き動かされたティラーが「おまえはおれのものだ！」と叫ぶと、ユウドラを船に乗せ、一向は立ち去っていく。(414-417) この唐突で読者を驚かせる、2人の激情の場面が、ウォーター・ウィッチ号と植民地との関係を断ち切り、逆に、ティラーとユウドラ、ゼファーによる、(植民地ではなく) 海の上での「疑似家族」の形成を読者に想像させる。

この結末で、ユウドラがゼファーに植民地での生活をすすめる場面が興味深い。ユウドラは「これがおまえにとって祖先の土地を知る最後の機会になるかもしれない。荒れ狂った海の恐ろしさ、ブリガンティン船がしばしば難破の危険にさらされてきたことを思い出してごらんさい」と言って、海上の生活をやめ、平穏な陸地での生活を選ぶよう説得する。(415) しかし、ゼファーが危険など感じたことはないと言い張ると、次のように陸地の魅力を伝える。

「でもね、国の奥深くに入っていけば、もっと美しいものを見ることができるんだよ——川とか山とか——洞窟や森だって——ここではすべて変化に富んでいる (all is change)、でも海はどこへいっても同じだろう」「まさか、ユウドラ、忘れていたなんておかしいよ。いいかい、ここは全部アメリカだろ (it is all America)。この山だってアメリカだし、入江の向こう側の陸地だってアメリカだよ。昨日停泊したのだからアメリカだったじゃないか。でもほくらが陸地を離れれば、次に行ける陸地はイングランドだったりオランダだったりアフリカだったりするだろ。風さえよければ、1日で国2つ3つの岸を

駆けることだってできるよ」(415)

ゼファーはこう言う。「ユウドラ、さよなら」と言って去っていく。(415) クーパーは海の上での生活に慣れた男の子をリアリスティックに描いているといえよう。しかし、ここで注目したいのが、ユウドラの言葉である。この言葉は、アメリカの自然の豊かさ、多様さを訴えており、ハイデガーの植民地自然賛美と呼応する、典型的なアメリカ・ナショナリズムを表している。それに対するゼファーの答えは、どこへいってもアメリカしかないという、いわばアメリカの変化のなさ、退屈さを強調するものになっている。ゼファーの言葉は、『レッド・ロウバー』に見られたナショナリズムを否定しており、逆に諸外国の魅力を訴えるものになっているのである。

この後の展開も、植民地ナショナリズムと相容れない。ユウドラも結局は陸地(アメリカ)を捨て、国から国へと渡り歩く生活を選ぶ。また、ウォーター・ウィッチ号が去った後の後日談では、ラドロウとアリダの結婚式は「もの悲しさ」を伴うものである。なぜなら、彼らは「あの冒険者たちの運命」にいつまでも深い関心を寄せていたからである。その後、それから何年もの月日が過ぎ、「何かを待ち望む千回もの眼差しが海へと向けられて」きたと語り手は言う。毎年初夏になると、アリダは「入江にあの密輸品を運ぶ船が停泊していないかと思い、毎朝窓辺へと急いだ」が、いつも無駄に終わる。また、アルダマンもアメリカの海岸全体でウォーター・ウィッチ号が見られなかったかどうか調べていたが、何も耳にすることはない。そして結局、ティラーらが「戻ってくることは決してなかった」という幕切れになる。(417-418) アリダには密輸船が持ってくる外国の商品や物語を待ち望む様子が、アルダマンには娘との再会を求める気持ちが読み取れるが、植民地に留まった人々が幸福になっている印象は与えない。むしろ、ティラーらが植民地に戻ってこないということは、アメリカでの生活より海上での生活に満足しているという想像を読者に引き起こす。

『水先案内人』や『レッド・ロウバー』では、独立後のアメリカの、落ち着いた家族の様子が大団円となっていた。しかし、『ウォーター・ウィッ

チ』ではそれが決定的に欠けており、ラドロウやアリダ、アルダマンを取り巻く家族生活が描かれることはない。むしろ、彼らはずっとティラーらを待望しているだけである。この結末は、彼らがアメリカに取り残されたかのようなイメージを読者に与える。特に、アリダは、ゼファーの言うように「退屈な」アメリカで、変化を求めているようにも読めるのである。

おわりに

本稿では主として、『レッド・ロウバー』と『ウォーター・ウィッチ』における非ナショナリスト的要素を分析してきた。『レッド・ロウバー』では、確かにフィルブリックの言う「海のナショナリズム」はプロットに反映されているものの、ハイデガーのゴシック的かつ文化的・民族的他者性は、ハイデガーの正当性を崩すものであった。また、植民地の象徴であるドルフィン号も決して理想的な民主的共同体とはいえず、しかも最後には解体される。逆に、植民地と英国との血縁関係のイメージが前景化され、両者の和解が暗示される結末となっていた。

『ウォーター・ウィッチ』では、『レッド・ロウバー』の非ナショナリスト的要素がさらに強化され、ティラーのみならずシードリフトも文化的・民族的他者性を体現し、ウォーター・ウィッチ号はもはや植民地の象徴というより、諸外国と通じた、より全世界的・商業的なイメージが付与されていた。さらに、英本国の敵であるはずのティラーが、共通の敵フランスを前に、ラドロウと協力して戦うという、『レッド・ロウバー』にはまったく見られなかった展開が表出した。そして、『レッド・ロウバー』でモチーフとなっていた、植民地人対英本国人という対立は崩され、植民地人であり、かつ英国人であるという二重のアイデンティティが、他ならぬティラーによって提示された。さらに、主人公の英国批判は希薄になり、最後の場面では自然賛美に基づくアメリカ・ナショナリズムが否定されてまっていた。逆に、シードリフトやゼファーの台詞に見られるように、アメリカは退屈で、諸外国の方が魅力的だという印象をテキストは与えている。『水先案内人』や『レッド・ロウバー』とは違い、アメリカに残った登場人物

の幸福な後日談は一切、描かれることはないのである。

『レッド・ロウバー』から『ウォーター・ウィッチ』に至る過程でナショナリズムが後退していることを、既に指摘している批評家もいる。ベックは、アメリカ独立革命（または革命そのもの）へのクーパーの不信感を強調し、革命が社会的な無秩序を生み出すとみなせば、過去にさかのぼる必要が出ているとし、小説の舞台を18世紀半ばからさらに過去の時代に変えたことに触れ、クーパーはアメリカ社会の現実から過去の牧歌的な世界に逃避したと解釈している¹⁵。イーガンも、海洋三部作が徐々に時代をさかのぼっていることに注目し、クーパーはアメリカ独立に関わる様々な問題から「退行」し、過去の時代に逆戻りすることで、「歴史の様々な力から守られた世界」を求め、その結果、アメリカとイングランドの「対立」を曖昧にすることになったと、ベックの解釈を追認している¹⁶。本稿の分析も、三部作の中で「アメリカとイングランドの対立」が曖昧にされたというイーガンの指摘に合致する。しかし、両者とも、クーパーがアメリカの現実から逃避し、過去に退行したと解釈しているが、『ウォーター・ウィッチ』に見られた、植民地から離れる、全世界的な（cosmopolitan）な傾向、諸外国へと目が向かう傾向は、単に「過去への遡り」だけとは解釈できない。そこには、1826年にヨーロッパに渡り、パリ滞在中に『レッド・ロウバー』を発表し、イングランドやスイスを旅行した後フィレンツェに二年間滞在し、さらにドイツへ行きパリに戻った後『ウォーター・ウィッチ』を発表するという、クーパー自身のヨーロッパ滞在経験が関係しているのではないだろうか。トーマス・フィルブリックとマリアン・フィルブリックは、『ウォーター・ウィッチ』におけるシードリフトのイタリア素描は、クーパー自身のイタリア旅行が情報源になっていると指摘しているが、こうした部分は『レッド・ロウバー』では見られなかったものである¹⁷。ゼファアの「どこへいってもアメリカではないか」という不満や「次に行ける陸地はイングランドだったりオランダだったりアフリカだったりするだろ」という言葉は、ヨーロッパを旅行していたクーパーの心情を部分的にも反映しているように読めるの

である。

『ウォーター・ウィッチ』で事実上、ナショナリズムが否認されたことから容易に予測できるように、以後、クーパーの海洋小説が「海のナショナリズム」を発信することはなくなる。初期海洋三部作で、クーパーのナショナリズムが希薄化したことは明白である。『ウォーター・ウィッチ』の結末で興味深いのは、ティラーの姿が、『水先案内人』のグレイの姿と重なっていることである。イングランド沿岸で育ったグレイは、英国への反抗心をあらわにし、独立戦争で植民地軍に加担した後、故郷英国を離れていく。それに対し、植民地沿岸で生まれ育ったティラーが、英国に反抗することなく、逆に英海軍巡洋艦に加担した後、故郷植民地を去っていく。前者は対英ナショナリズムを色濃く反映している。しかし、後者はそれが逆転しており、主人公は英国に加担し、かつ植民地を去っていくのである。三部作最後の小説が、どれほど第一作のナショナリズムを脱構築しているかが分かる。ティラーの植民地への決別は、クーパーの「海のナショナリズム」への決別を表していたのである。

¹ Philbrick, 52-58.

² 米山正文 「『水先案内人』における国家像」『宇都宮大学国際学部研究論集』第45号（2018年）、127-136.

³ Philbrick, 56-58.

⁴ Ringe, 31-32.

⁵ Peck, 602-604; Eagan, 70-71.

⁶ Cohen, 140-155.

⁷ Iglesias, 21-26.

⁸ Cooper[1991], 302. 以下、『レッド・ロウバー』からの引用はこの版により、頁番号を末尾に括弧で示す。

⁹ Cohen, 155.

¹⁰ Philbrick, 57.

¹¹ Philbrick, 56-58.

¹² Cooper[2010], 265-267. 以下、『ウォーター・ウィッチ』からの引用はこの版により、頁番号を末尾に括弧で示す。

¹³ Peck, 601.

¹⁴ Iglesias, 21-22.

¹⁵ Peck, 603-604.

¹⁶ Eagan, 70.

¹⁷ Thomas & Marianne Philbrick, xv-xvii.

引用文献

Cohen, Margaret (2010). *The Novel and the Sea*.

Princeton: Princeton University Press.

Cooper, James Fenimore (1991). *The Red Rover*, A

- Tale*. Ed. Thomas & Marianne Philbrick. Albany: State University of New York Press.
- (2010). *The Water-Witch; or, The Skimmer of The Seas*. Ed. Thomas & Marianne Philbrick. New York: AMS Press.
- Eagan, Hugh (1995). "Cooper and His Contemporaries." *America and the Sea: A Literary History*. Ed. Haskell Springer. Athens & London: The University of Georgia Press. 64-82.
- Iglesias, Luis (2010). "Transatlantic History And American Nationalism in James Fenimore Cooper's *The Red Rover*." *The Nautilus: A Maritime Journal of Literature, History, and Culture*. 1. 15-30.
- Peck, H. Daniel (1976). "A Repossession of America: The Revolution in Cooper's Trilogy Of Nautical Romances." *Studies in Romanticism*. 15. 589-609.
- Philbrick, Thomas (1961). *James Fenimore Cooper and the Development of American Sea Fiction*. Cambridge: Harvard University Press.
- Philbrick, Thomas and Marianne Philbrick (2010). "Historical Introduction." James Fenimore Cooper. *The Water-Witch; or, The Skimmer of the Seas*. Ed. Thomas & Marianne Philbrick. New York: AMS Press. xi-xxxii.
- Ringe, Donald A (1962). *James Fenimore Cooper*. New York: Twayne.

(本稿は平成 28-30 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 「海洋文学と建国神話——19 世紀前半のアメリカ」 (課題番号 16K02482) の成果の一部である。)

The End of the Colonists' Nationalism: From *The Red Rover* to *The Water-Witch*

Masafumi Yoneyama

Abstract

This paper explores how James Fenimore Cooper addresses the issue of nationalism in *The Red Rover, A Tale* (1824) and *The Water-Witch; or the Skimmer of the Sea* (1830). Captain Heidegger in *The Red Rover* represents the revolutionary nationalism of the thirteen colonies. Some critics have stressed Cooper's "maritime nationalism" by analyzing the captain's heroic achievements in the battle with the Royal Navy. In contrast, this paper focuses on how the nationalist elements of *The Red Rover* are deconstructed throughout the novel. Heidegger is presented as Gothic and cultural other. The multi-ethnic piratical group under his dictatorship, the epitome of the colonies, is presented as opposing democratic ideals. The final revelation of his kinship with Harry Wilder, who represents the Royal Navy, reduces the conflict between Britain and colonial America. *The Water-Witch* further reduces the conflict between them. Tom Tiller, the hero of the novel, is an illegal trader revolting against the British regulations along the American coast. However, unlike Heidegger, he does not dream of the political and commercial freedom of the colonies. He is more cosmopolitan and more involved in commercial enterprises all over the world. While Heidegger celebrates the victory of Revolution and dies, Tiller leaves the colonies and never comes back. This paper maintains that from *the Red Rover* to *Water-Witch*, Cooper abandons his maritime nationalism and leans towards cosmopolitanism.

(2018年10月15日受理)